

丹波の後期古墳

- | | |
|------------------|--------------|
| 1. 丹波からみた古墳時代後期 | 細川 康晴 P1～6 |
| 2. 南丹市の古墳の調査 | 辻 健二郎 P7～14 |
| 3. 南丹市 城谷口古墳群の調査 | 中川 和哉 P15～20 |

日時：平成19年7月1日（日）

場所：南丹市八木公民館

主催 京 都 府 教 育 委 員 会

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

後援 南 丹 市 教 育 委 員 会

丹波からみた古墳時代後期

京都府教育庁指導部文化財保護課

主任 細川康晴

1 古墳時代後期とはどんな時代か

○古墳の形が変わる

- ・古墳時代前期には、各地域で最も有力な首長の墓は前方後円墳^{ぜんぽうこうえんふん}で始まることが多い。
- 中期には、その地域で最大規模の前方後円墳が築かれ、古墳が巨大化する。
- 後期には、各地の前方後円墳の規模が縮小し、消滅していく。小規模な古墳は円墳が一般的になる。

○古墳に葬られる人が増える、変わる

小規模な古墳が密集する群集墳^{ぐんしゅうふん}

○埋葬施設が変化する

長持形石棺^{ながもちがたせつがん}が使われなくなる。近畿に冢形石棺^{いへがたせつがん}が運ばれる。(九州から阿蘇ピンク凝灰岩製の石棺が運ばれる。)近畿でも横穴式石室^{よこあなしきせきしつ}が用いられる。(片袖式石室が用いられる。)

○副葬品の変化から分かること(手工業生産が発達する=渡来系の技術の定着)

- ・窯業が発達、普及する。
須恵器^{すえき}が普及する。(各地方の窯で生産が始まり量産される。) →瓦の生産
- ・国産の砂鉄を原料とする鉄生産が本格化する。
馬具が普及する。(実用的な鉄製の轡^{くつわ}などが量産される。)
- 長刀が生産され、鉄鍔^{てつそく}が量産される。
- ・金属工芸が発達する。(鋳物や鍍金^{とくきん}の技術が発達し普及する。)
- 装飾大刀が普及する。(規格的な環頭大刀^{かんとうたち}が量産される。)
- 金環、銀環が量産され普及する(金や銀を定着させる技術の普及。)
- ・国産のガラス生産が始まる。(終末期から)
ガラス小玉が量産される。(鋳型法)

○住居の構造などから分かること

- ・ 竪穴式住居に竈^{かまど}が普及する。
- ・ 竪穴式住居から掘立柱建物へ変化していく。

2 古墳時代後期の東アジアと日本

○古墳時代後期の東アジア（朝鮮半島の動乱と日本）

5世紀末には朝鮮半島北部の高句麗^{こうくわ}が南西部の百済^{くだら}を攻め、6世紀には南部の伽耶諸国^{かや}をめぐり、南東部の新羅^{しらぎ}対伽耶・百済の戦いに倭国（日本）も関わったものとも考えられています。562年に新羅に攻められ伽耶諸国はついに滅亡してしまいます。

○古墳時代後期の日本（有力豪族の覇権争い）

大伴氏、物部氏^{ものべ}から蘇我氏^{そが}へ

○埋葬の手続きと死後の世界観の変化（東アジア共通の横穴系の墓）

- ・ 横穴式石室への追葬（家族を同じ墓室に）
- ・ 須恵器に食物を入れ棺の中に供えるなど死後の世界観に変化

3 古墳時代後期の南丹波（大堰川水系）と北丹波（由良川水系）

○前期の古墳

南丹波 園部垣内古墳^{かいち}（中型前方後円墳・粘土郭・三角縁神獸鏡^{ねんどかくさんかくぶちしんじゅうきょう}・腕輪形石製品）

北丹波 広峯15号墳（中型前方後円墳・木棺・景初四年銘鏡）

○中期の古墳

南丹波 柘塚古墳、坊主塚古墳等（中型方墳・甲冑）

北丹波 聖塚古墳（大型方墳・甲冑）、私市円山古墳^{きさいち}（大型円墳・甲冑）、沢3号墳（中型前方後円墳）

○後期の古墳の動向

南丹波

古墳時代中期には、南丹波地域では、他の多くの地域と異なり、有力な古墳は、方墳で築かれていました。ところが、後期初めに、突如、前方後円墳の千歳車塚古墳（亀岡市）が、南丹波地域全体の首長墓として築かれ、近畿中央の勢力との強い結びつきを示します。後期前半には、北ノ庄古墳群（亀岡市）に、北部九州の石室の作り方による横穴式石室が築かれ、北部九州との強い結びつきを示しています。一方で、後期中葉からは、石棚付き石室が複数築かれ、紀伊との結びつきも強めています。このように、南丹波の各地域の勢力は、近畿中央の各地の勢力のみでなく、北部九州、紀伊などの各地の勢力とも個々に強い結びつきを示し、時代とともに地域の勢力の間の政治的な結びつきは、複雑に変化していたことに気づきます。

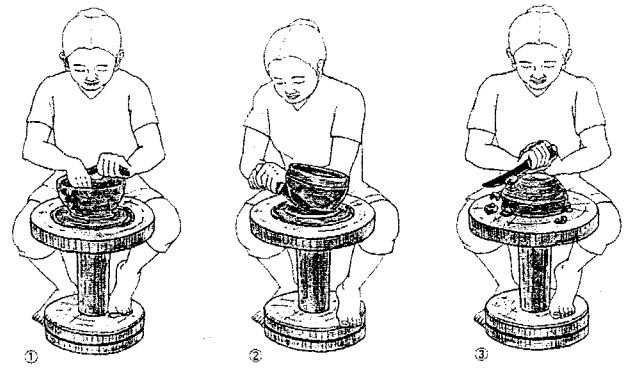
北丹波

後期初めには、高槻茶臼山古墳（綾部市）が北丹波地域で最大規模の前方後円墳として築かれますが、これは若狭への交通路を重視した立地とも考えられます。しかし、その後は、墳丘長が40m前後の前方後円墳が狭い地域ごとに築かれ、北丹波地域の中で突出した規模の前方後円墳が築かれることは二度とありません。北丹波地域が、それぞれの地域で同じような小規模な前方後円墳を築くことのできる社会になったのは、どのような原因があるのかたいへん興味深い課題です。

このように丹波地域の占める位置は、地理的にも近畿中央の大和、山城、摂津などの勢力と日本海側の丹後、但馬、若狭の勢力を結ぶ要の位置にあり、たいへん重要な地域であることが改めて分かります。古墳時代後期という朝鮮半島及び日本国内の動乱の時代の中で、丹波地域が日本の歴史の中で果たす役割や重要度も常に複雑に変化していたものと思われます。

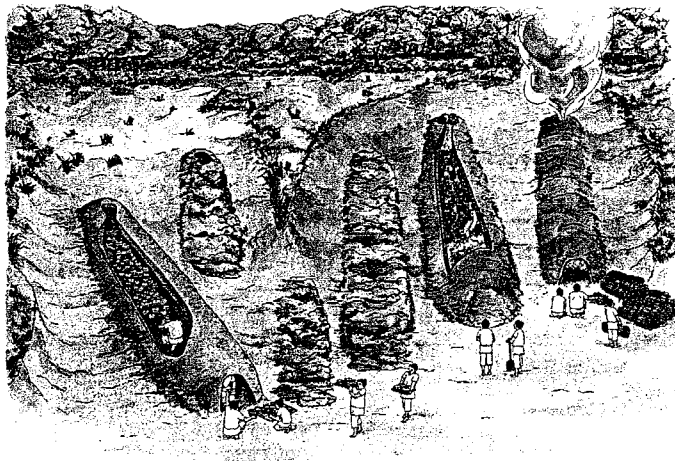
時期	須臾器	北丹波 (由良川流域)				南丹波 (保津川流域)		山城	丹後	主な出来事	参考
		西部 (福知山・夜久野)		東部 (綾部)		北部 (木・園部)	南部 (亀岡)				
		牧川	和久川・弘法川	犀川	八田川						
後期初期	T K 23 型式並 行期	カヤガ谷5		犀川 高谷6			☆穀塚	○(妙見堂) ☆夕たべカニ4	471 辛亥年欽剣 478 倭王武末に 上表	○高井田山 ☆西塚 ☆(下船塚)	
初期	T K 47 型式並 行期		後正寺		☆黒田北2 ○小山1 今林2 新堂池6	☆千歳車塚 ☆保津車塚 (拝田10) 中2	○上狛天竺堂 青山2	○七面山	503 隅田八幡宮 人物画像鏡 507 継体即位	☆埼玉稲荷山 ☆(大谷) ☆十善 の森 ☆番塚 ☆(関 行丸) ☆江田船山	
後期前半	M T 15 型式並 行期		☆稲葉山10	☆(以久田野78) 荒神塚	○徳雲寺北6	北ノ庄14 北ノ庄13	☆二子塚 ☆天塚 ☆青山1	離山	527 磐井の乱 531 総体没 538 仏教公伝 539 欽明即位	☆今城塚 ☆市尾墓山 ムネサカ4 ☆大谷山6・22 ☆花山6 ☆獅子塚 ☆岩戸山	
後期中葉	T K 10 型式古 段階並 行期		池の奥3・6 中坂5	○(以久田野80)	小谷17	☆(拝田16) 医王谷3	☆物集車塚 ☆井ノ内車塚 坊主山	○太田2 ○大耳尾2 崩谷3 霧ヶ鼻11・10		☆鶴稲荷山 ☆南塚 ☆西宮山 ○丸山塚 ☆寿命王塚	
後期後半	T K 10 型式新 段階並 行期	流尾 ○(長者森)	池の奥4	☆(稲荷山) 高谷3	城谷口2 天神山2・1 新堂池2・1	鹿谷18	☆井ノ内稲荷塚	☆黒田2 入谷西A1 遼所1		☆大和二塚	
後期末葉	T K 48 型式並 行期	☆牧正一 (道勤加山1) 長尾	鴨野1 ☆男塚 仏山2	神谷谷4		拝田8・9 小金岐76 国分S T66 (加舎西山10) (法真峠9)	大蔵寺3 ○黒土1	(平野) 湯舟坂2 (西外) ☆(新戸)	571 欽明没 587 蘇我馬子物 部守屋を滅ぼす 588 飛鳥寺建立 589 隋中国統一	☆高土塚 ○平群三里 ○藤ノ木○牧野 ☆こうもり塚 ☆見瀬丸山	
後期末葉	T K 209 型 式並行 期	○弁財 (岩田1)	西谷5 仏山1 拳塚塚 中坂6 城ノ尾	神谷谷3 ジンド 高谷2 細谷1・2・4	坊田5 徳雲寺北3	小金岐17・71・1 医王谷1	○今里大塚 ○双ヶ丘1 ☆(蛇塚)	岡1 桃谷 入谷11・14	600 遺傳使派遣 604 聖徳太子憲 法17 条作る 607 小野妹子遣 隋使	○赤坂天玉山 ☆岡田山1	
終末期	T K 217 型 式並行 期以降		西谷6・7・4 中坂7・8	細谷3	天神山3	医王谷4 小金岐9・4・6 校峠18 国分S T80・41	旭山 醍醐	上野2 千原2 上司	645 乙巳の變 646 大化薄葬令 663 百濟滅亡 672 壬申の乱 676 新羅統一	○石舞台○岩屋山 御廟野(天智陵) 野口王墓(天 武・持統陵)	

※☆前方後円墳または前方後方墳 ○直径20m以上の円墳または方墳またはは遺輪あり () 須臾器未出土

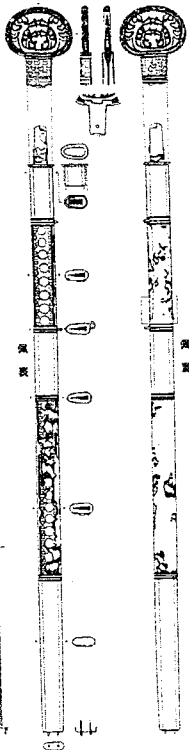


①陶質土器・初期須恵器 (京丹後市なくおかきた奈具岡北1号墳)

②須恵器の作り方想像図



③須恵器の窯かまの想像図 (奈良時代)



⑤とぎん鍍金の想像図

※①~⑤は京都府立丹後郷土資料館編「人と技術-見えてきた古代丹後」より転載

④環頭大刀 (京丹後市ゆぶねさか湯舟坂2号墳)

———— × 毛 ————

南丹市の古墳の調査

南丹市教育委員会社会教育課

主任 辻 健二郎

1. はじめに

南丹市を含む口丹波の地域には多くの古墳が築かれており、その多くは、横穴式石室を内部主体とする古墳です。南丹市だけでも古墳の数は502基にのぼり、前方後円墳はそのうち8基にすぎません。方墳は53基あり、円墳は441基を数え、古墳総数の88%に及びます。

口丹波における前方後円墳の築造される傾向をみると、前期の段階で園部盆地に50mを超える古墳が造られています。黒田古墳、中畷古墳、垣内古墳の3基の古墳です。これらの古墳の中でも特別な存在であるのが、垣内古墳で非常に多くの副葬品が出土しています。こうした前方後円墳の築造は、園部盆地においては継承されず、かわって篠山盆地の雲部車塚古墳が一带を支配していたと考えられます。その後、後期の段階に入ると亀岡盆地に千歳車塚古墳が築造されるという変遷がみられます。

2. 方墳と円墳

南丹市域の古墳の様子をみていくと、前期段階で前方後円墳が築かれた後、中期になると古墳は方墳へと変化していきます。そうした例の一つが塚本古墳です。この古墳は、2重の周濠をもつ古墳で、埋葬施設は既に削られてなくなりましたが、埋葬施設が残っていれば岸ヶ前2号墳や今林3号墳のように豊富な副葬品が納められていた可能性があります。こうした方墳が顕著になる傾向は、南丹市や口丹波だけの特色ではなく、丹波という地域の特徴でもあります。しかし、中期段階に方形化した古墳も後期には円形へと移行し、横穴式石室が採用されて以後は、古墳の多くが円墳という状況を呈するようになります。

そうした流れを示す古墳群として徳雲寺北古墳群があげられます。中期前半に造られた1号墳を中心に合計6基の古墳が造られています。6世紀後半に横穴式石室が造られ、古墳群としての築造を終えています。ここで注目されるのが、5世紀末から6世紀前半の段階で、方墳から円墳へと古墳の形が変化していることです。こうした変化は、平山丘陵の古墳群においてもみられます。

徳雲寺北古墳群と同一の谷に存在した^{こやま}小山古墳群は、2基の古墳からなり、1号墳が一辺18mの方墳で、^{もつかんじきそう}木棺を直葬する^{しゅたいぶ}主体部をもちます。一方2号墳は横穴式石室を内部主体とする古墳で、同一尾根上で^{もつかんじきそう}木棺直葬から横穴式石室への変化がみられます。このように横穴式石室が導入される以前に方墳から円墳への^{ふんけい}墳形の変化がみられるとともに方墳から横穴式石室へという直接的な変遷もあり、後期前半段階では、方墳と円墳が混在している状況があると考えられます。

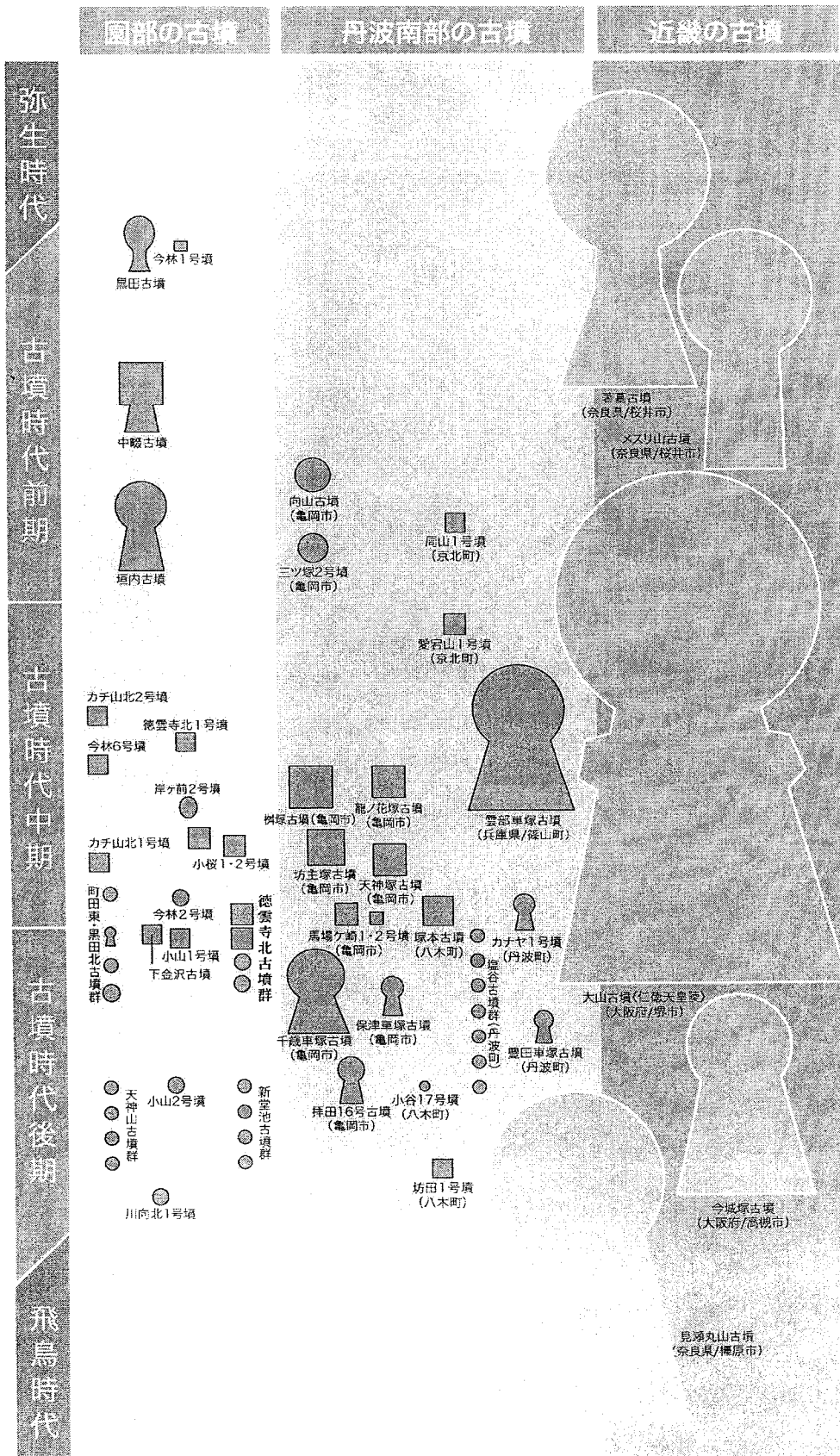
この時期には方墳や円墳だけではなく、前方後円墳も南丹市域において再び築造されるようになります。^{くろたきた}黒田北古墳群は、4基の古墳からなる古墳群で、2号墳は全長18mという最小規模の前方後円墳です。この2号墳が築かれた後、北側に2基の古墳が築かれています。このように中期段階では、古墳の多くが方墳でしたが、中期末から後期初めの段階においては、非常にバラエティーに富む構成になっています。

3. おわりに

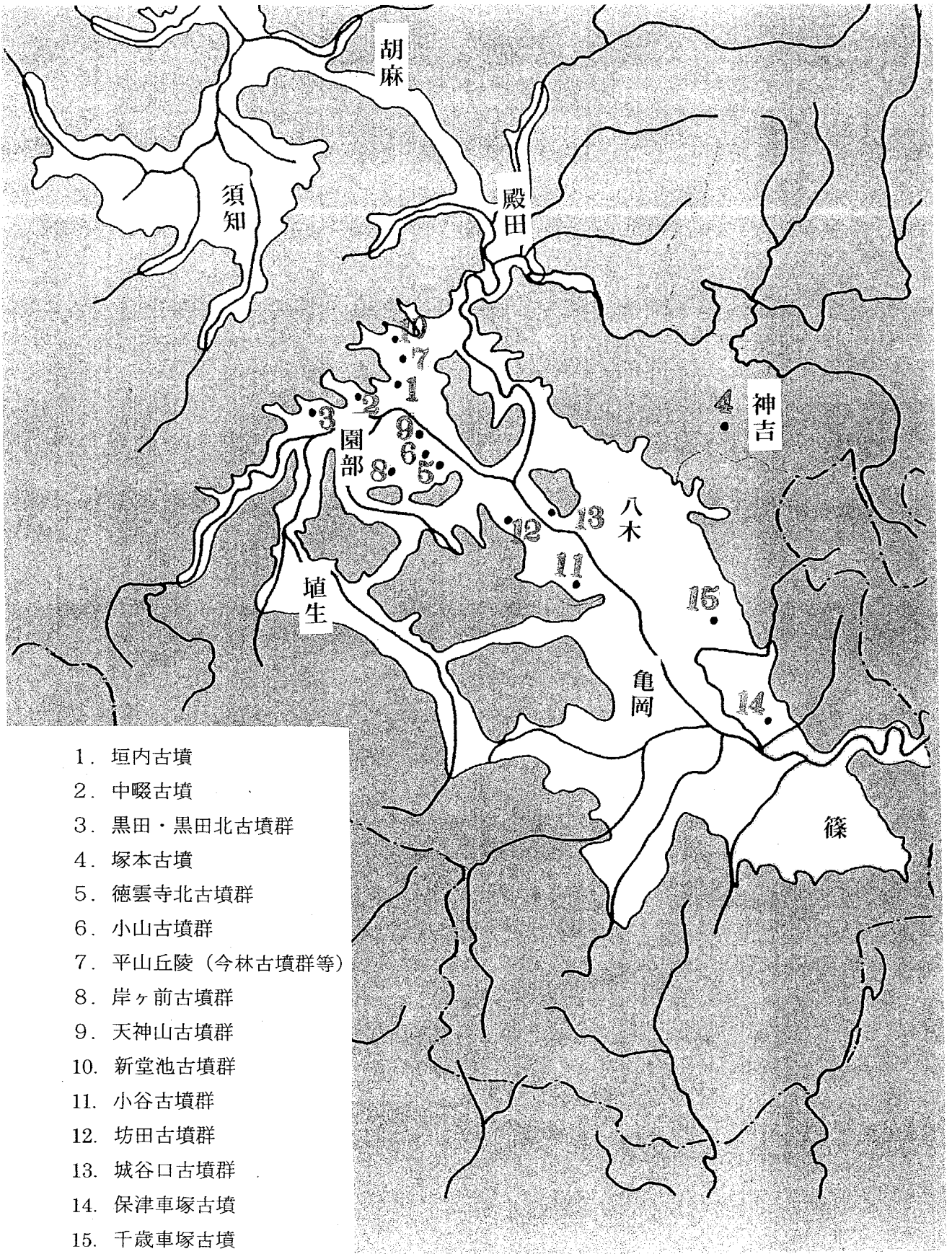
前方後円墳は地域の^{しゅちようふん}首長墳であると言えますが、方墳から円墳への変化は何を表しているのでしょうか。1つ考えられることは、この時期は畿内のヤマト王権が揺らいでいた時期にあたるということです。^{わおうぶ}倭王武と考えられる^{ゆうりやく}雄略天皇以後の系譜から、王権と系譜関係の薄い^{けいたい}継体天皇が即位するという時期と重なります。一つの推測ではありますが、この時期に地方支配体制についても大きな変化があり、その変化が古墳の墳形の変化として現れたということも考えられます。

横穴式石室が埋葬施設として採用されると古墳のほとんどが円墳化していきます。その中でも^{ほうだ}坊田古墳群は方墳を採用している点で異色な存在です。内部主体の横穴式石室も^{こたに}小谷17号墳や^{てんじんやま}天神山1号墳、^{こやま}小山2号墳のように正方形に近い平面形態のものから、細長い^{けんしつ}玄室をもつ^{かわむかいきた}川向北古墳群や天神山3・4号墳などに変化しています。こうした変化の中、^{しんどういけ}新堂池1号墳のようにL字形に近い石室の平面形をもつ特異な石室もみられるようになります。

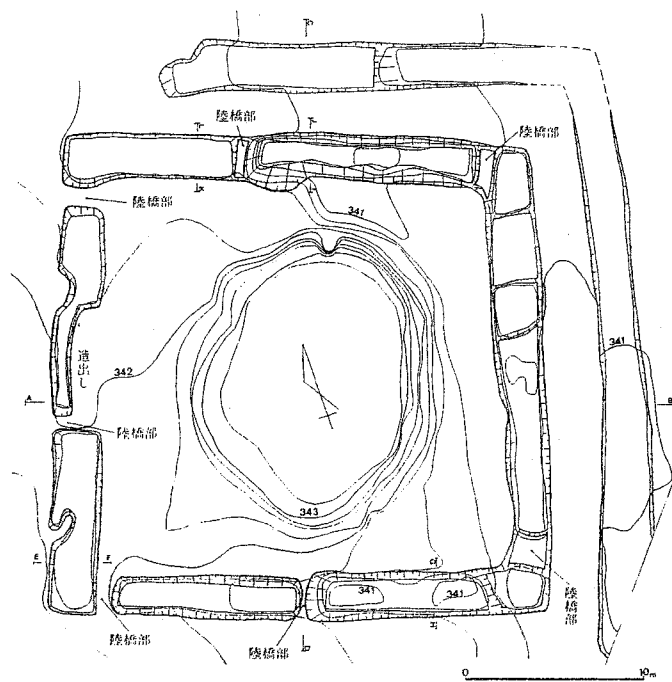
丹波南部の古墳編年表



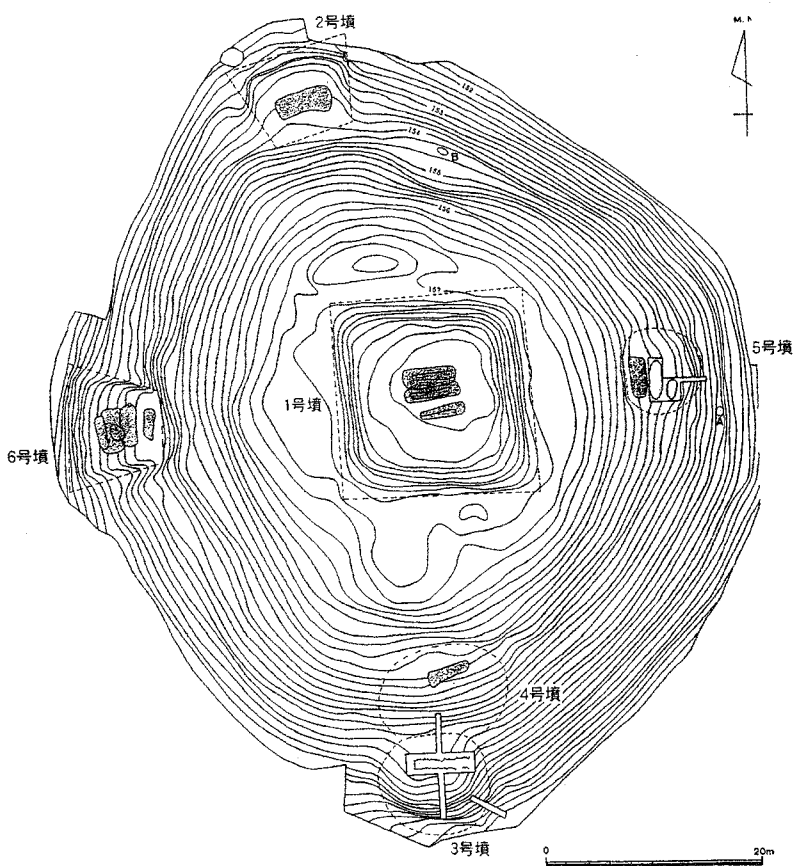
第1図 古墳編年表



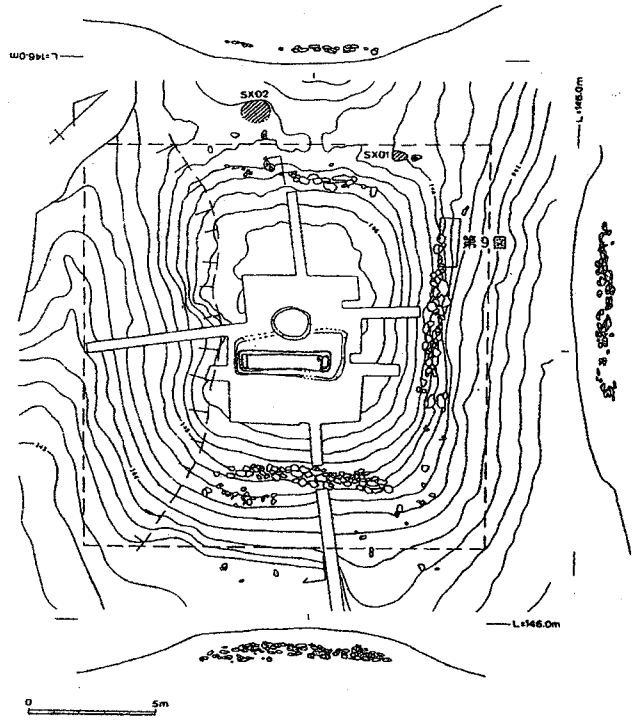
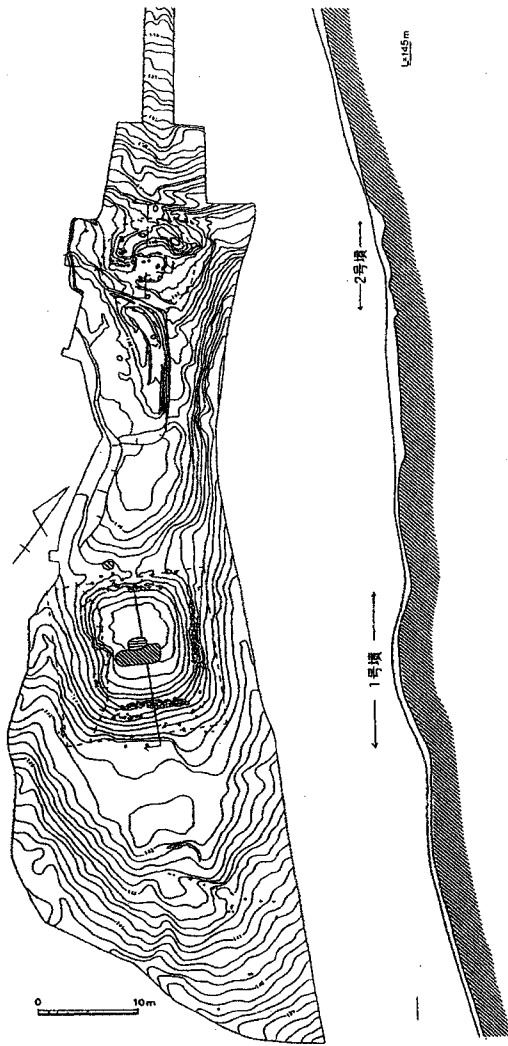
第2図 古墳分布図



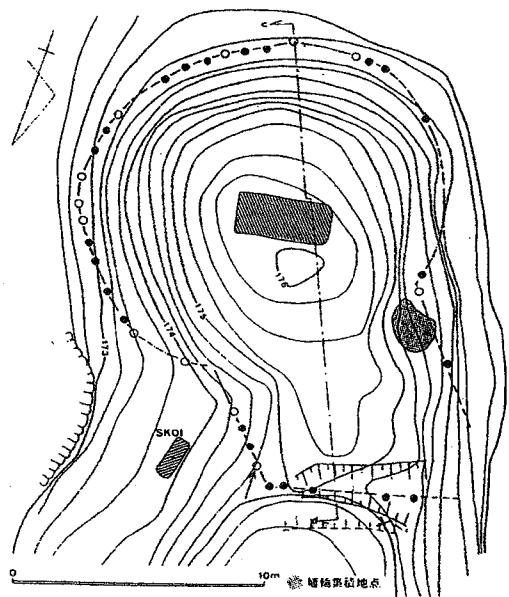
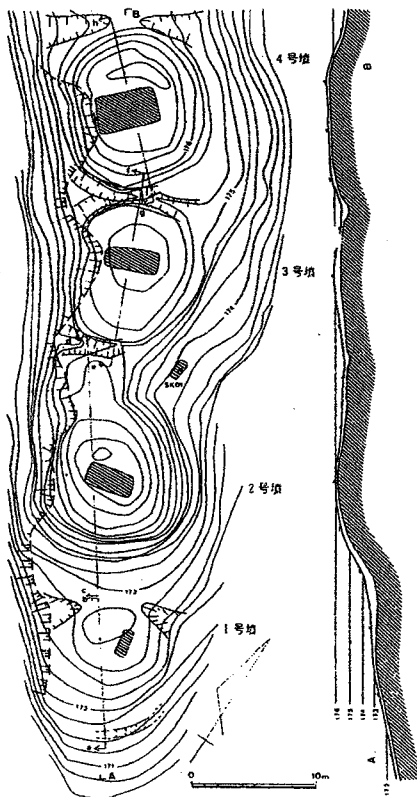
第3图 塚本古墳平面图



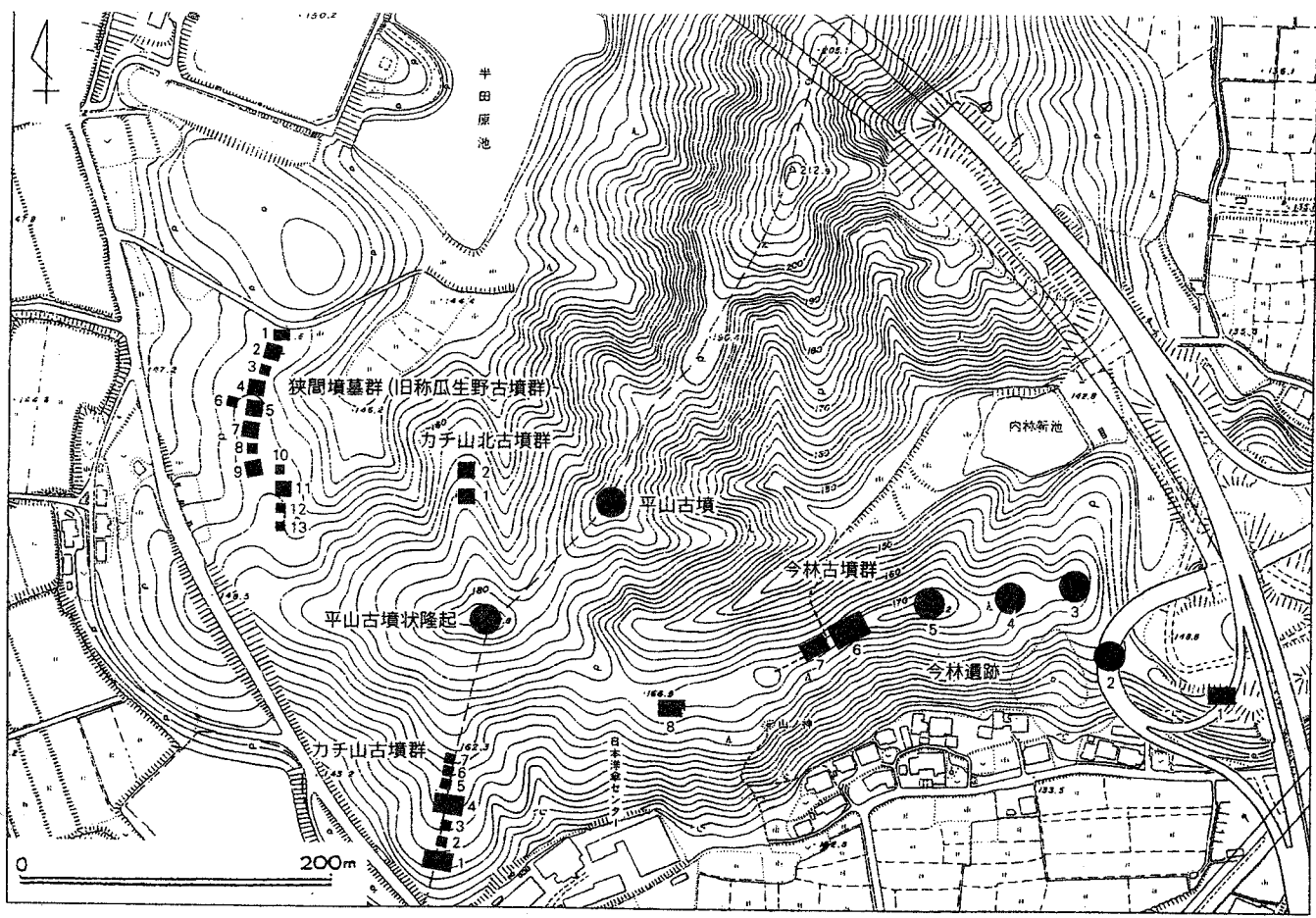
第4图 徳雲寺北古墳群平面图



第5图 小山古墳群平面图

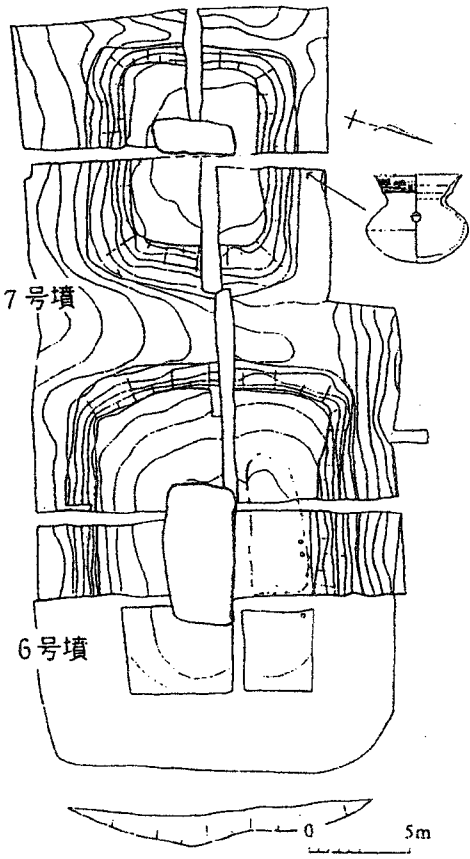


第6图 黒田北古墳群平面图

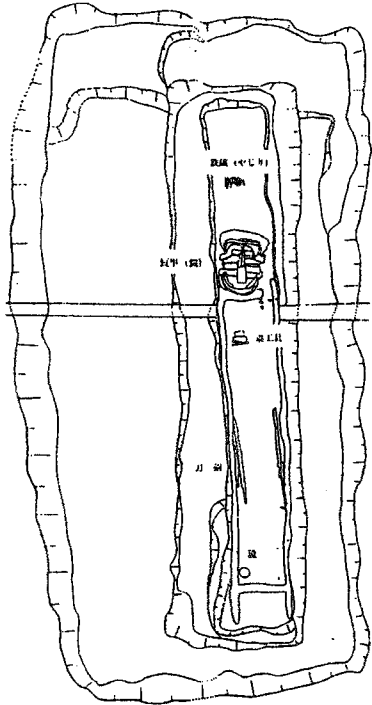


第7図 平山遺跡群の古墳分布図

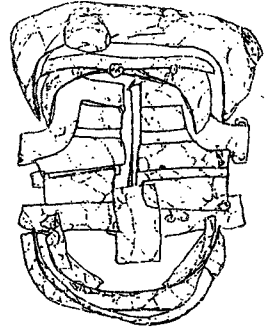
今林6号墳



今林6・7号墳平面図

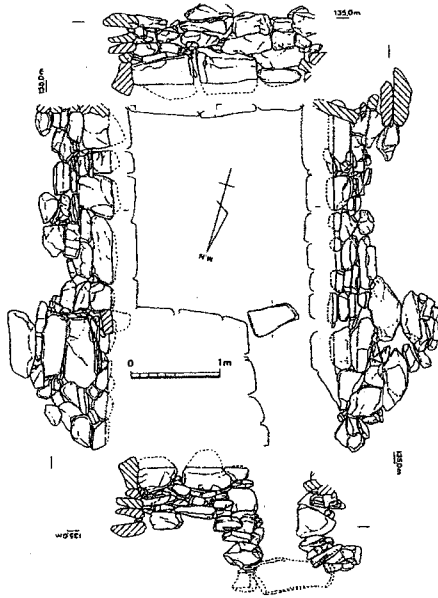


今林6号墳主体部副葬品出土状況図

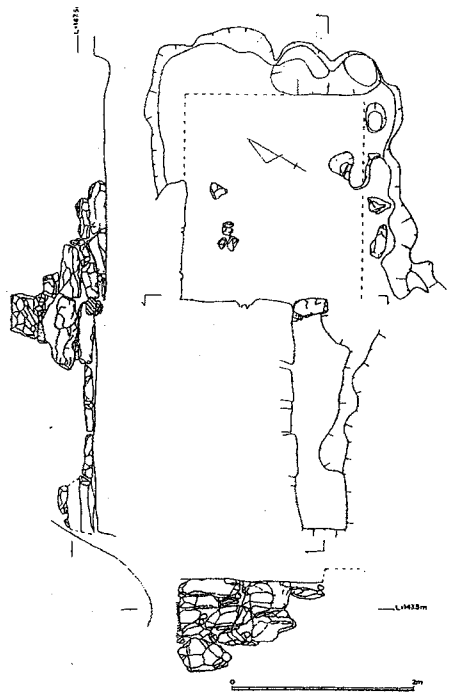


今林6号墳出土甲

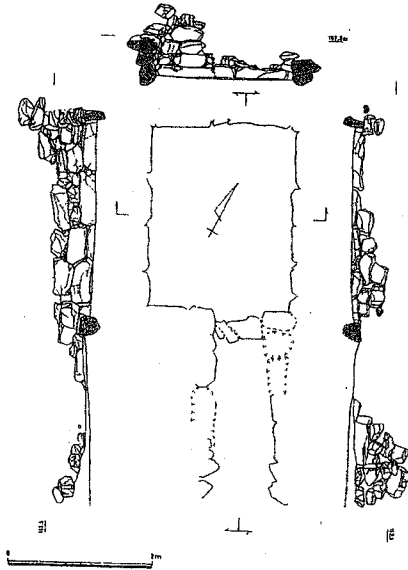
第8図 今林6号墳平面図



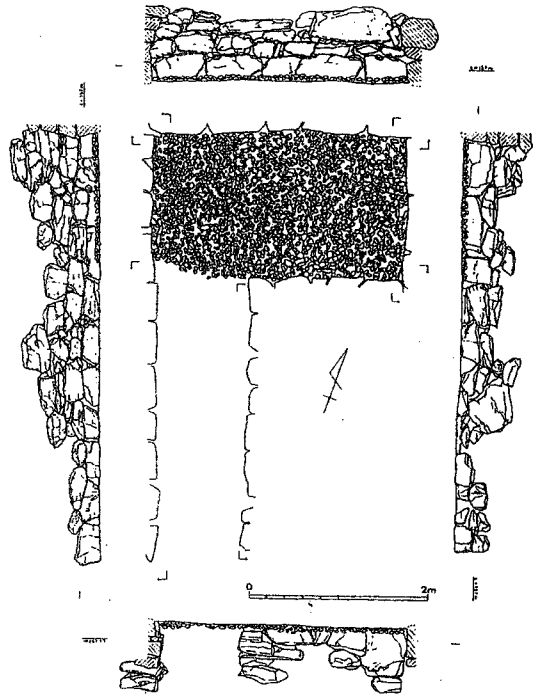
小谷17号墳



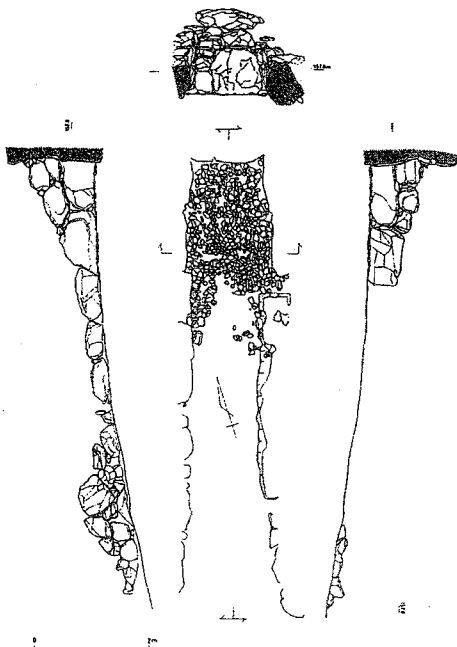
小山2号墳



天神山1号墳



新堂池1号墳



天神山3号墳

南丹市 城谷口古墳群の調査

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

主任調査員 中川和哉

1. はじめに

城谷口古墳群は、南丹市八木町北広瀬に所在します。古墳群は、亀岡盆地北端に位置する筏森山を最高所とする独立山塊の東側の谷部に造られています。谷の開口方向には、約300m離れて桂川が流れています。筏森山の尾根部には多くの古墳が築かれています。最も大きなものは筏森山の最頂部からやや下がった部分に築かれた全長約40mの前方後円墳です。

城谷口古墳群は方墳5基以上と、円墳10基以上の古墳群です。これらの古墳群を支えた集落としては、筏森山東側の100棟を越す竪穴式住居跡が発見された池上遺跡があげられます。筏森山の丘陵に築かれた古墳群の多くは池上の集落を中核とする人々の墓域であったと考えられます。しかしながら、城谷口古墳群のある谷は桂川に向かって開き、筏森山の西側には集落があったとは現在の地形からは考えられませんが、桂川が現在より西に流れていたとも考えられますので、谷の前面に未知の集落があった可能性もあります。

2. 調査成果

2号墳 周囲に溝が回る直径約11mの円墳で、主体部は両袖の横穴式石室です。石室の玄門部げんもんと奥壁部おくへきには赤色顔料がんにりょうが塗られていました。墳丘が大幅に破壊されていますが、石室床面はほぼ完全に残っていました。少なくとも3度以上の追葬が確認でき、石棺状に石を立てた石障せきしょうが奥壁部と右袖部そでぶに設けられていました。奥壁部の石障からは全長70cm弱の蛇行剣だこうけんと直刀ちよくとうが出土しました。右袖部の石障では須恵器すえきの杯つぎを枕にした頭骨が残っていました。出土遺物から6世紀前半に作られた古墳と考えられます。この古墳の墳丘には、石列としてめぐっていたと考えられる石が部分的に認められます。

3号墳 一辺が20mを越す方墳で、埋葬主体部は木棺直葬もつかんじきそうです。墳頂部までの高さが5m程度あり、丹波地域の方墳ではめずらしく非常に墳丘が高い古墳です。墳丘は四方に葺石ふきいしが施されていました。主体部しゅたいぶを確認しただけで棺の中を本格的に調査していない

ため、管玉^{くだたま}以外の遺物を検出していません。4～5世紀の古墳と考えられます。

6号墳 墳丘部は縦約12m、横約8mの方墳で三方に葺石を持ち、3方に幅約4mの周壕^{しゅうごう}が掘られています。主体部からは鉄鏃^{てつそく}・鉄鎌^{てつかま}・鉄鑿^{てつのみ}・刀子^{とうす}・白玉^{うすだま}などが出土しています。5世紀前半の古墳です。

7号墳 方形の古墳で、三方向に葺き石を持つと考えられます。谷側の辺が広く、上から見ると台形状を呈しますが、頂部平坦面は長方形です。主体部は木棺直葬です。古墳の規模は長辺が13m程度と推定できますが、おおくが調査区外となるため確定できません。出土遺物に直刀・剣・白玉があります。5世紀代の古墳と考えられます。

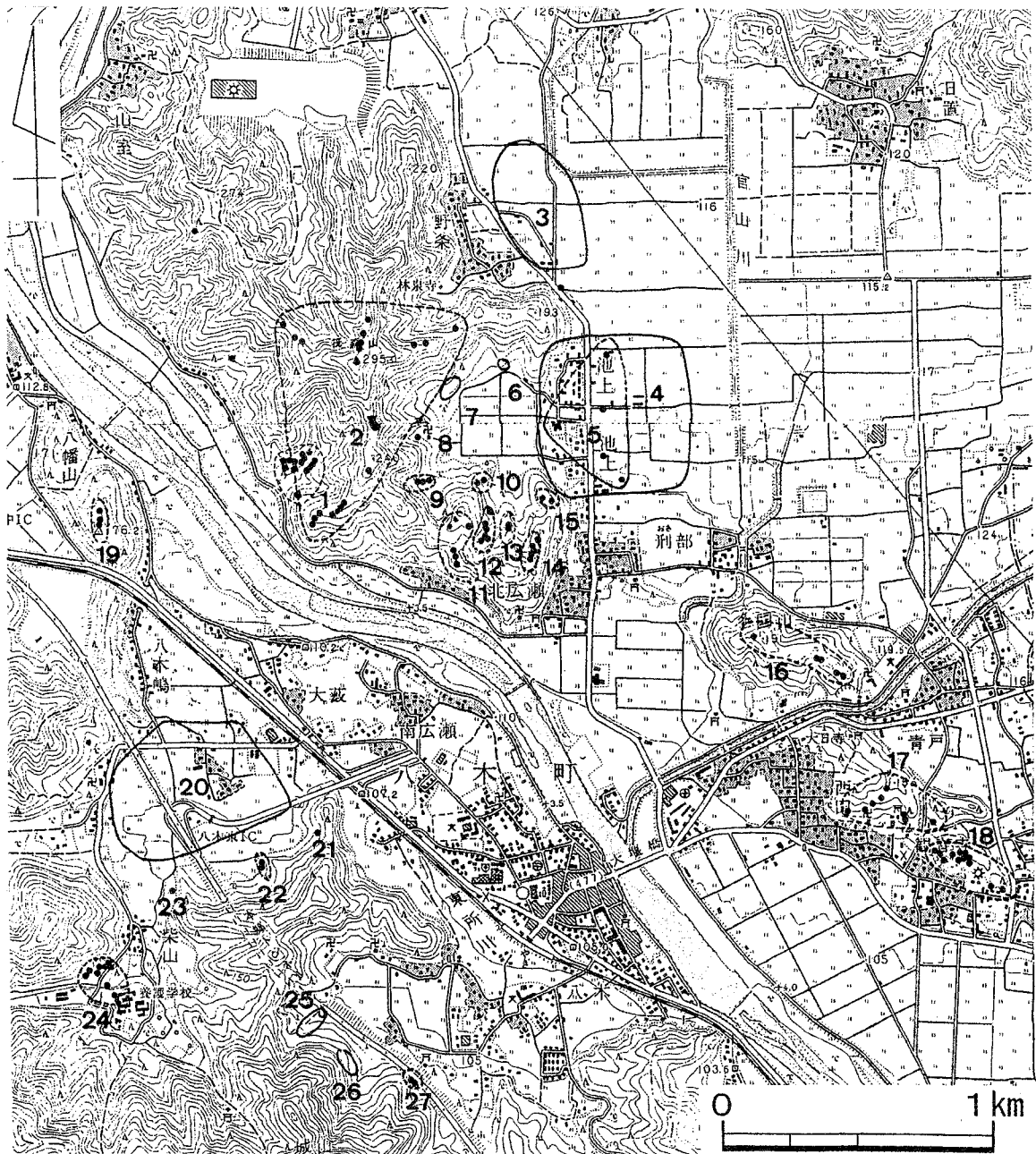
1・8号墳～13号墳 直径約7～12mの円墳で、主体部は無袖^{むそで}の横穴式石室です。6世紀後半から7世紀にかけて作られたものです。9号墳は、今回の調査地内では、幅、長さとも最小の石室ですが、最も標高の高い位置に築かれています。11号墳の出土遺物には須恵器^{じかん}・耳環^{じかん}・刀子^{とうす}などがあります。他の石室では須恵器の杯身^{つぎ}・杯蓋^{つぎ}が中心に副葬されていましたが、11号墳では、長頸壺^{ちようけいこ}・平瓶^{へいへい}などの杯以外の器種が多く見られます。12号墳からは、少なくとも2体分の人骨が発見されました。大腿骨の位置などから、追葬^{ついそう}の時に以前に葬った人の骨を隅に片付けた様子がわかりました。

3. まとめ

城谷古墳群のある西向きの谷部には多くの方墳、円墳があることがわかりました。

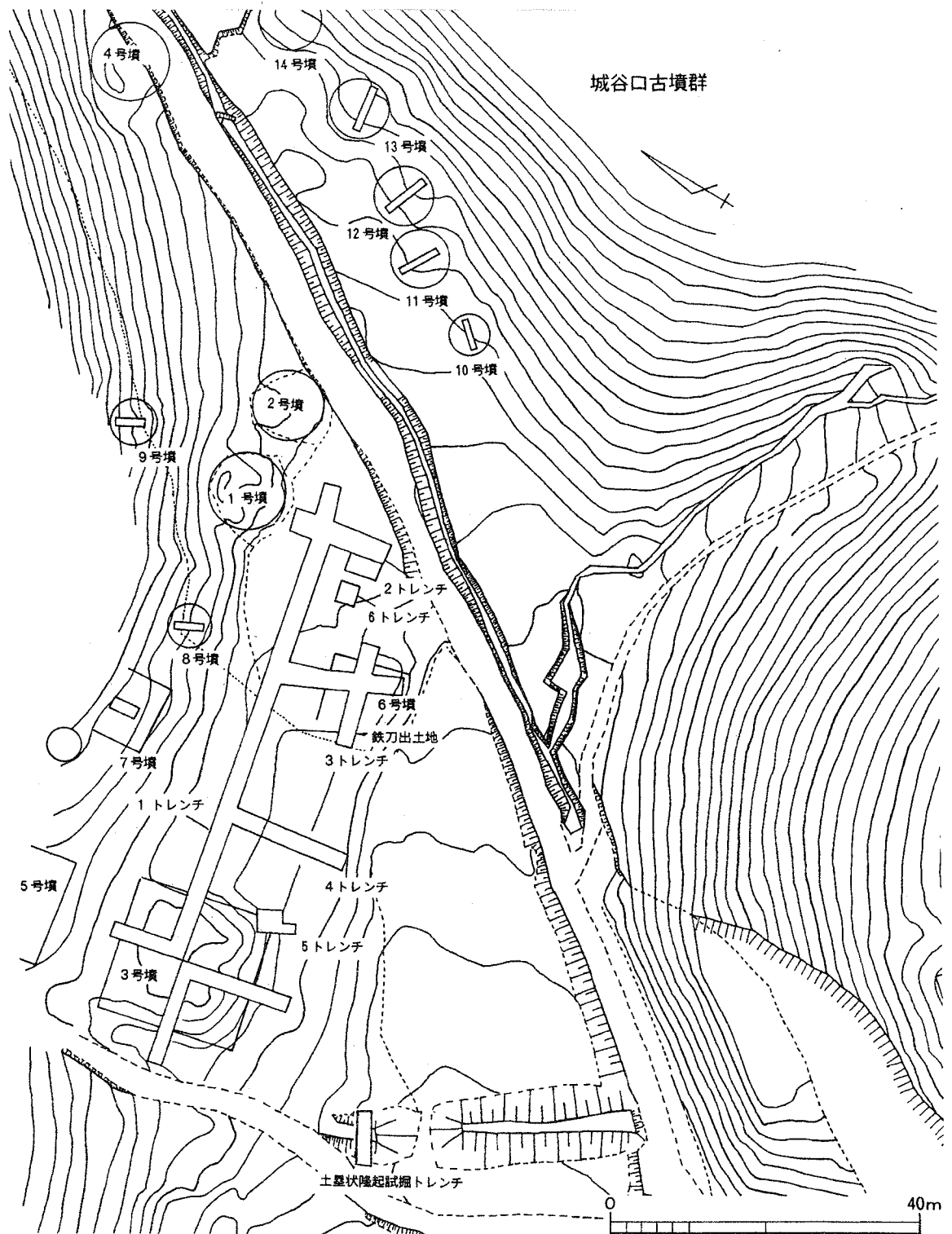
3号墳は平面的な大きさとともに墳丘が高く、南丹地域において有数の中期古墳です。古墳群の構成では、方墳が中期、円墳が後期と、同じ地域に営まれた古墳ですが、時期によって墳形が異なります。

2号墳は九州地方に多く見られる横穴式石室との類似点が多く見られます。出土遺物を見ると、蛇行剣^{しよそう}が初葬時^{しよそう}と考えられる場所から出土しています。蛇行剣は6世紀代に入ると、九州の宮崎県や鹿児島^{ちかしま}の地下式横穴^{ちかしまおろけつ}からのみ出土している遺物として知られています。この南九州に特有な遺物が南丹市から発見されたことは、この地域の古墳文化を考える上で重要な視点を提示しているものと考えられます。

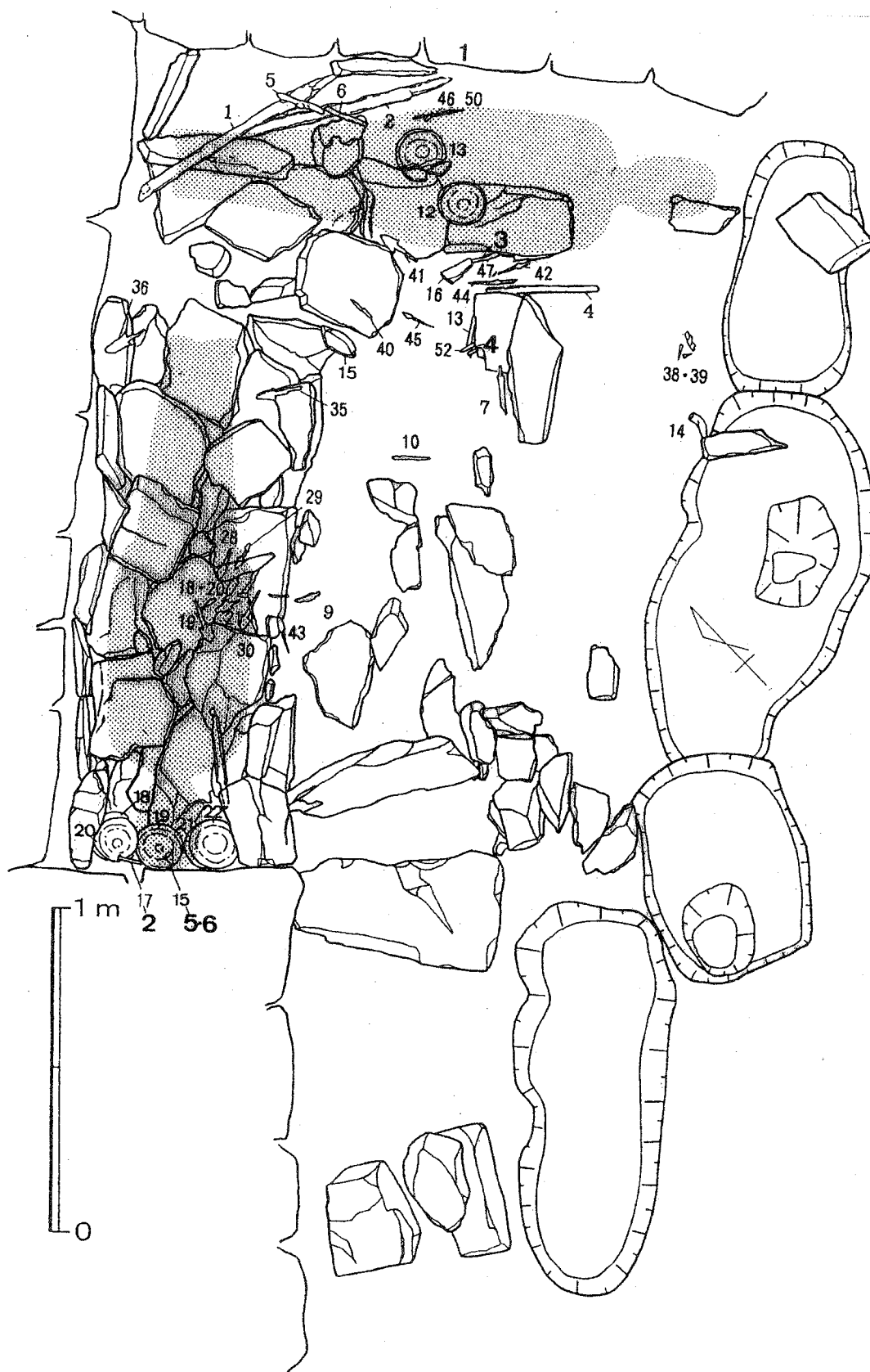


第1図 調査地位置図および周辺遺跡分布図

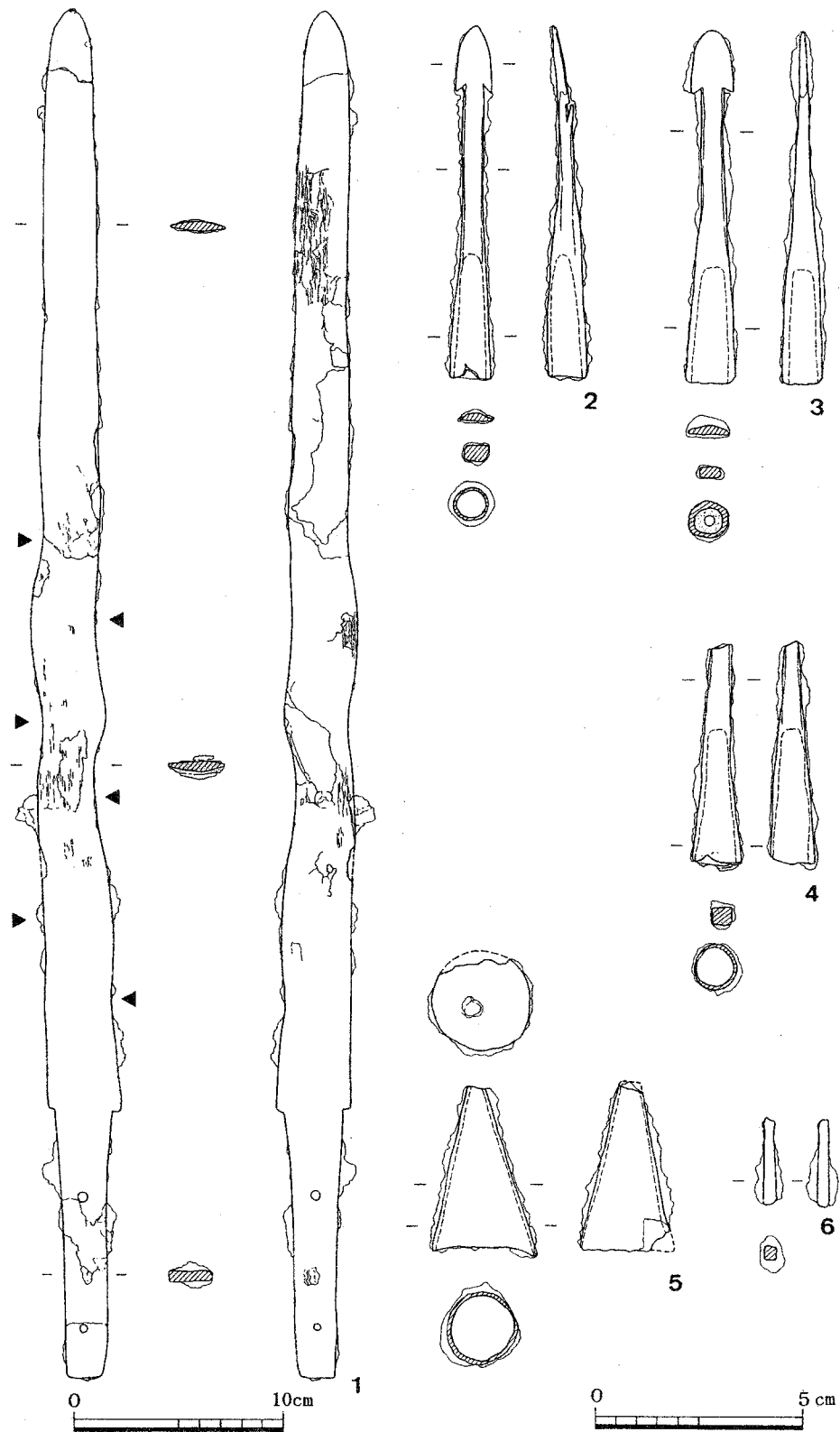
- | | | | | |
|-------------|------------|------------|---------------|-----------|
| 1. 城谷口古墳群 | 2. 筏森山古墳群 | 3. 野条遺跡 | 4. 池上遺跡 | 5. 狐塚古墳群 |
| 6. 八幡宮古墳 | 7. 池上院北古墳群 | 8. 池上院裏古墳 | 9. 寺内古墳群 | |
| 10. 寺内古墳群 | 11. 南尾西古墳群 | 12. 南尾古墳群 | 13. 南尾東古墳群 | |
| 14. 北広瀬城古墳群 | 15. 寺内東古墳群 | 16. 多国山古墳群 | 17. 住吉神社裏山古墳群 | |
| 18. 池内古墳群 | 19. 八幡山古墳群 | 20. 八木嶋遺跡 | 21. 鶴首山古墳 | 22. 森古墳群 |
| 23. 柴山古墳 | 24. 坊田古墳群 | 25. 堂山釜跡群 | 26. 小谷古墳群 | 27. 西所古墳群 |



第2図 城谷口古墳群地形測量図



第3図 2号墳1次床面遺物出土状況



第4図 城谷口2号噴出土の特殊な鉄製品